

◆【海員随想】丹沢紀行③ 小林信博

塔ノ岳入口は表丹沢の玄関ともいふべきところで、多くの入山者はここから登る。この辺りは登山道の両側のヒノキは伐採され、ススキとササのはげ山である。友人が思わず口から「来るたびに木が減って荒れているなあ」といっていた。火山でもないのに、こんなに裸になっている山も少ないと思いながら、登っていった。そのはげ山の中央で、冬枯れたススキを刈っている人たちが数人いた。70日以上雨なしで、乾燥しまっている。火災防止のためだろうか。それとも、これから植林するための準備だろうか。塔ノ岳入口はかなり下の方になってしまった。二ノ塔まではあと標高差にして350メートル程だろう。呼吸調整がまだ完全でないために相当にきつい。普通、私は歩き始めて1時間程度で調整が終わるが、今日は柏木林道が割り合いにゆるやかだったためだろう。汗は額だけではなく、髪までも濡らしている。しかし、なんといっても苦しいのはほこりである。下山する人たちとすれ違っても、自分が一步進むにしても、ほこりが喉に入ってくる。思わずタオルを口に入れてしまう。乾燥した赤土が風に舞い、吹きおろす風に乗って正面から飛んでくる。今度の山行きで最初から最後までこの赤土のほこりに苦しめられた。

ヤビツ峠から1時間20分、1,144メートルの二ノ塔に着く。ミカンを食べ、ジュースを飲んで5分間の休憩の後、三ノ塔を目指す。三ノ塔はすぐ目の前に見える。15分で三ノ塔の頂上に着いた。風は冷たい。谷から頂に向かって吹き上げてくる。登りの時とは正反対である。脱いでいたセーターをあわてて着込み、ザックの中から弁当の握り飯を出し、さらにコップの中のをケトルを出し、ガスコンロにかけてお湯を沸かしにかかった。しかし、ガスが途中でなくなってしまい、固形燃料に替えたが、ゴトクがない。石を集めてゴトクの代用にし、続けて沸かした。煎茶のティーバッグを入れ、握り飯をガブつきながら、熱いお茶で喉を潤した。美しい富士山を望みながらのお茶は格別である。例年であれば、この辺りに来ると雪が見られるが、富士山も8合目から上の方に冠をつけているだけだ。途中で会った幾人かの人たちも、雪を期待していたようだった。三ノ塔からの展望は、遠く江の島から真鶴半島まで、そして箱根、愛鷹、富士の山々まで箱庭のように見える。そして頂は塔ノ岳、丹沢山、蛭ヶ岳、桧洞丸と連ねている。

三ノ塔を後に塔ノ岳を目指して出発した。休憩中に寒かった体も、歩き始めて5分もすると、すぐに汗をかいてくる。途中、鳥尾山と行者岳の2カ所の鎖場を通り、チョッピー、スリルを味わい、瘦尾根をたどって1時間程するうちに、急な登りであるにもかかわらず、声に出ない鼻歌を口ずさんでいた。体の調子が整ってきた証拠である。この辺から、周囲は落葉したブナの原生林となっている。